

バンクーバー美術館における美術教員研修の事例

エミリー・カーと4人の芸術家の事例

福田 隆真

On the Teacher's Guide for School Programs in Vancouver Art Gallery
- A case study of the exhibition of the works by Emily Carr and four other artists -

FUKUDA Takamasa
(Received January 10, 2012)

キーワード：美術教員、教員研修、美術館、エミリー・カー、バンクーバー

はじめに

本稿はバンクーバー・アート・ギャラリーにおける美術教員を対象とした教員研修の事例を紹介するものである。⁽¹⁾美術館の社会貢献や学校教育との連携活動は日本においても活発に行われるようになった。ここでの事例は、「エミリー・カーと4人の芸術家(In Dialogue with Carr)」の展覧会を活用した教員研修の例である。カナダを代表する歴史的な芸術家のエミリー・カーに対して、現代の4人の芸術家が対話することを想定して芸術家の作品を展示する展覧会である。⁽²⁾以下に、この展覧会に関連した教員のための研修プログラムを述べる。

1. プログラムの概要

1-1 展覧会概要

美術館のキュレーターは現代の様々なメディアで制作する4人の芸術家と、BC（ブリティッシュコロンビア）州の最も著名で歴史的な芸術家であるCarrとの繋がりを創造する展覧会を実施した。彼らは州の風景画、⁽³⁾個人のストーリー、そして先住民（First Nations）⁽⁴⁾に関する出版物を考慮して、絵の具、光、ガラス、キルト、写真、デジタルメディア、音、庭を手入れする道具、棒、ワゴンを使ってカーと繋がり、対話した。

1-2 教員への資料のメッセージ

この冊子は展示会を観るための準備に役立ち、そして、訪れた後、議論を容易にするための活動を提供する。訪問前後に提案された活動を行うことで、訪問によって生まれたアイデアを強固なものにし、美術館での経験と普段教室で行っていることを関連付ける。多くの活動は道具が不要で、どのような生徒に対しても簡単に順応できる。

1-3 展覧会見学の目標

- ・カーと4人の芸術家の繋がりを探求する。
- ・キュレーターの役割を考える。
- ・個々の芸術家の手法を、技術、アイデア、要素、道具、材料、インスピレーションの多方面から検証する。

2. 展覧会の解説

① 4人の芸術家はカーに注目したことで、今日、仕事上の関係を築いている。4人の作品は直接、カーに対する返答はしないし、意識的な影響を明かすこともない。むしろ、彼らはカーが一世紀前に始めた、森の変化からの芸術的な手法や、また個人的なストーリーから先住民が表現されたものに及ぶテーマについて、対話を続けている。そして、現代の芸術家はあるときはカーの考えを受け入れ、あるときは拒絶する。

② カーと芸術家たちの対話は予測されにくいので、私たちが探求できる新たな内容を生む。また、両方の芸術家たちの作品は対話によって説明され、新たな疑問を生む。しかし、そこから生ずる意味は作品の本来備わっているものを意味しない。それどころか、それらは私たちの理解を深め、視野を広げるためキュレーターによって意識的に作られたつながりである。

③ カーはBC州では地理学の内容を定義することに手を貸した芸術家として知られている。彼女の森の描写は、私たちが考える森の景観やそれに含まれる私たち自身を表わしている。そして、頻繁に挑戦しながらも、彼女の土着文化に対する見方はネイティブではない人々が感じたものを通り越して、先住民に関連するものとなった。

④ カーの視点に対立するものはニコルソンによって生み出された。彼女はクワキウトル文化の内面を表わした人である。彼女は深い理解、責任、立場上の特権を持っていた。そして、彼女の文化を紹介するための知識を十分に持っていた。彼女は強固な態度で古い伝統を吹き込み、個人的な意味を付け加えるために、伝統的ではない要素であるガラス、写真、光と影を使って彼女の芸術的な視野を変え、広げた。

⑤ ダグラスは固定観念と表現の問題に取り組んだ。作品の概念も同様に、彼のキルトの細部には、いくらか現代の要素による皮肉を込めて作られていて、主流の文化に伝統的概念が込められたものである。これらの作品がカーの先住民のデザインを使って装飾された粘土の作品と比較されるとき、彫像の適切性についての疑問はこれら二人の芸術家の対話によって生まれてくる。

⑥ リーのBC州の森が燃えている鮮烈なイメージは、カーの油絵と驚くほどの類似点を生む。この繋がりは明らかだが、実は大きく異なっている。カーは彼女が理解していた景色の範囲内で、彼女自身が森の一要素であることを捉えようとした。リーはネットから写真をダウンロードし、印刷し、操作した。二人とも芸術家的には異端者であるが、彼らの時代のメディアの限界点を押し上げることになった。

⑦ メイガーはカーと彼女自身の生活スタイルの間に多くの共通点を見つけた。これは芸術的な繋がりというよりむしろ、個人的な繋がりであって、二人の対話の下地を作るものである。カーは広大な森を描くために、動物とともにキャンピングカーで暮らし、自身を隔離した。メイガーは外観者の立場を再確認し、彼女の芸術家として、また、女性としての挑戦の中に互いの共通点を見つけた。彼女は動物、森、景観、社会の縁や空間に深い親近感を持っている。彼女の作品（大きなワゴンにいっぱい生活用品）は避難方法や、人と動物、街と森との関係についての疑問を通して、対話を広げていく。

3. 芸術家の背景

エミリー・カー (Emily Carr) :

本人の言葉 :

先住民の人々と彼らの芸術は私たちに深く感動させる。家に帰ったとき、私は決意した。出来る限り、彼らの街のトーテムポールを描写するつもりだった。

解説 :

カーは1871年に生まれた。彼女はその世代で最も重要な芸術家のひとりで、トーテムポールとバンクーバー島の森の絵画が最も有名である。彼女はサンフランシスコ、ロンドン、フランスで芸術を勉強した。フ

ランスではアウトドラスケッチの新しい手法を学んだ。1912年にカナダに戻った後、彼女は北の先住民の村を訪れ、先住民（First Nation）をモチーフとした作品の下地を生み出した。これらの作品はヨーロッパでの現代的思想の探求に影響されていて、彼女は明るい色、潰れたブラシを使う画法を用いた。カーはそれらを州政府に売ろうとしたが、これはドキュメンタリーではないと断られた。本質的に抽象的過ぎて、芸術家の視点が入りすぎていたからであった。彼女は落胆し、ビクトリアへ戻った。宿を経営し、牧羊犬を育て、陶器を作り、芸術を教え生計を立てていた。1913～1927の間、彼女はほとんど絵を描かなかった。

1927年、カーの作品はオタワの展覧会にあった。この展覧会は、他の芸術家、特に、彼女の作品を認めた七人グループの芸術家たちへ、彼女を紹介するものになった。1930年代、カーは風景画、特に彼女の専門である森に対して、集中して注目し始めた。これらの絵はBC州の景観を彼女の強い個性で表わしていて、スピリチュアルな彼女の信念が自然に見出すことができる。

1930年代後半に、彼女は体調を崩し、本を書くことに熱中し始めた。このとき書かれたものの中に、「クレー・ウィック（Klee Wyck）」という1941年に受賞した先住民と彼女の経験を書いた本も含まれている。彼女は1951年にビクトリアで亡くなったが、重要な作家、芸術家として認識されている。

ダグラス・クーブランド（Douglas Coupland）

本人の言葉：

私には深い安全を求める感覚と、様々な地形、ハンノキ、メープルの木の幹、木々に対する数えきれない思い出があり、私はここ以外の場所には住めなくなった。私が森で木々を見つめたとき、カーの絵に見られる自然との繋がりを見ることができる。もし私がカーとの繋がりを感じたとしたら、それは私が彼女と同じ方法で木々を見て体験したということである。

解説：

クーブランドは1961年にドイツで生まれ、彼が現在も住んでいるバンクーバーで育った。彼は彫刻専攻でエミリー大学を卒業したが、広く作家として知られている。彼の処女作である「Generation X」は1981年に出版され、大成功であった。この本はその世代や一般的な文化との関係を定義するようになった。彼は12冊の小説、7冊のノンフィクションを書き、たくさんの映像や短編を創った。最近の彼は視覚的な芸術の道に戻り、執筆活動と並行して活動している。彼は展覧会でカーの作品を見ているときに、陶芸品（彼女を支援する先住民のデザインを使って作られた）を観て、すぐさま応えた。

問題は私の作品を売るという理由で、他の先住民アートについて何も知らない芸術家たちが、作品に手を加えるということだ。これには腹が立つ。私は先住民アートのことはわかっているつもりだが、理解のない彼らに作品をゆがめ、軽視することを良くは思わない。

クーブランドはカーの作品に対して、二つの異なった意見を持っている。シャロン（Sharon）とカーリン（Carlyn）とのコラボレーション作品では、彼は大きなキルト、ブランケットを創った。これらは一般的な文化と先住民の特有の文化を融合する。彼はカーを含む他の芸術家に対して、本来備わってない意味を創造してよいのかと問うた。

彼はカーとの空想の対話を地元の女優と共に行った。これは実に面白く、現代の文化を理解することで、カーの無能さに基づいたたくさんの誤解を示した対話となった。

エヴァン・リー（Evan Lee）

本人の言葉：

イメージやアートが何を意味するかということは、カーの時代以来、複雑で大きな問題である。もし、彼女の時代に、絵を描くこと、イメージすることが、何を意味しているかを彼女が探していたとしたら、そうだ、そこには変容したものに固執しない何かがあるのだ。

解説：

リーは1975年にバンクーバーで生まれ、現在も在住している。彼はブリティッシュ・コロンビア（BC）大学で美術を学んだ。専門こそ絵画だったが、主な手段は写真を撮ることへと変えた。彼の作品はバンクーバー、トロント、モントリオール、上海で展示され、多くの公共の場でも飾られている。そして、彼は現在エミリー大学とBC大学で教職に就いている。

森林が燃えているシリーズでは、リーはインターネットで見つけたイメージで作品を創る。インクジェッ

トプリンターを使って、それらのイメージを紙の反対側に印刷する。すると、インクは吸収されるというよりむしろ紙の表面に浮くようになる。筆、アクリル絵の具を使って、彼はインクを表面に広げ、その工程のなかで、それぞれの写真は面白い絵画になる。

リーは写真の伝統概念にたくさん挑戦した。彼のイメージを発見する方法は適切なアイデアを生み、彼がデジタルのイメージを操作している間に、簡単には真似できない作品になる。展覧会で、彼の作品はカーの油絵部門に置かれた。彼女の作品の多くは森の景観だったが、抽象画の現代主義者として、彼女は当時の多くの慣習に挑戦した。

リズ・メイガー (Liz Magor)

本人の言葉：

私はたぶん、カーの作品を考察するというより、カーがどう生きてきたかに着目した。彼女の芸術家たる決定と共に現れる金銭的かつ社会的な強調は普通ではない。カーの例を通して、私はこの場所（景観と最先端社会）をヨーロッパの実存するものとみなすことができる。これは若く小さな町で、芸術家になることが出来るという考え方を私に与えた。

解説：

メイガーは1948年にカナダはウィニペグで生まれた。彼女は幼いころ家族と共にバンクーバーに移り住んだ。彼女はBC大学、ニューヨークの学校、そして、バンクーバーの芸術学校で勉強した。1980年代はほとんどカナダのトロントで過ごし、その後、バンクーバーに戻り、エミリー大学で教員となった。彼女の作品はドイツで大々的に展示されていた。そして彼女は2001、2009の賞を含む、たくさんの賞を獲得した。

メイガーの作品は彫刻のような、写真のような要素を含んでいて、しばしば多くのインスタレーションの形式を用いていた。彼女は様々な材料（ブロンズ、アクリル、日用品、天然素材、庭の土）を使った。彼女はたくさんのアイデアやテーマを探求したが、避難所、宿などは彼女の作品に周期的に見られる。作品には強い物語の要素や特別な話の要素が存在する。

「Beaver man」が展示されるのは二回目である。1977年に丹精込めた手作りのカートを創った。このときバンクーバー美術館のスタッフは彼女の指示のもと、店で買った材料で作りなおした。元々、土は彼女が庭で掘り、持ってきていたが、今では買われたものが使われている。そして、作品の本来持つ概念だけでなく、新しい問題に直面している。多くの現代の芸術家のように、メイガーも作品を作りかえることに関して、広報、メディア、著作権の問題を主張した。

彼女はより直接的に女性としてのカーと芸術家としてのカーを、カーの作品において繋がりをつくった。彼女はカーを彼女の時代の慣習や流行に反発するという難しい選択をする一人の女性、または芸術家としてみなしている。

マリアン・ニコルソン (Marianne Nicolson)

本人の言葉：

私は、カーの場合、彼女が活動している期間に理解しがたい何かが起こっていると思う。初め、彼女は家、人を描き、その後ポールを描いた。そしてこれらは無くなった。まるで、すべての象徴が取り除かれても、感情や意味だけはそこにとどまっていたようだった。

解説：

ニコルソンはクワキウトル族の母親、スコットランド人の父親のもと、BC州のコモックスで生まれた。彼女はエミリー大学で美術学士、ビクトリア大学で修士を取り、クワキウトル族伝統の彫刻を作る先生に弟子入りした。彼女はビクトリアに住み、活動した。そして現在、言語と人類学のための博士号取得を目指している。彼女の作品はいたるところでsite-specific⁽⁵⁾の作品として展示されている。

ニコルソンの作品はクワキウトルのコミュニティで使われていた伝統的で儀礼的なものから、公共の場のための概念的な作品まで広範囲にわたる。これらは伝統的なデザインと現代のデジタルメディアとのつながりをつくる。また、新しい材料を使った伝統的な概念を再解釈する。

ニコルソンの作品である「Baxwana」は所有者の価値を含んだ、曲がっている木製の容器のアイデアを基にしている。彼女はこの考えを再解釈し、伝統的なアボリジニーのデザインと家族写真をグラスにエッチングした。光は両側にみられ、グラスの中心から広がり、壁には影が映し出されている。その部屋は綿密に

設計されていて、壁は箱のイメージを確かに映し出していて、全ての空間がコンテナ内部へと変わる。私たちも影で壁にとらえられ、作品の一部になるのだ。

彼女は特有のクワキウトル文化を持った人である。カーはそれを消費し、アラートベイ付近で絵を描いた人間である。ニコルソンは想像で絵を描き、大きく変化している文化でさえ解釈する。純粹で伝統的なもののなかでは彼女はもはや存在しないのだ。

4. 事前準備

目的：

生徒が五人の芸術家の癖、影響、興味、そして繋がりを探求すること。

材料：

・インターネット：参考すべきWeb site

www.wikipedia.com

<http://www.emilycar.ca/>

(各芸術家はグーグルで検索できます)

- ・個々の芸術家の本
- ・生徒用ワークシートと芸術家の情報シート
- ・筆記用具、鉛筆、クレヨン

準備：

クラスを五つのグループに分ける。それぞれの芸術家の情報を各グループ一つずつに分配する。各グループにそれを読ませる。難しい言葉を理解する。生徒に本またはインターネットを使わせ、情報を掘り下げる。芸術家の作品どれか一つを詳しく説明できるようにさせる。各グループに芸術家について発表させる。

まとめ：

- ・生徒に芸術家とその作品について、共通点や相違点を尋ねる。
- ・芸術家は何か共通のもの（材料、技術、考え方など）を持っているか。
- ・芸術家は特筆して、BC州の人間、またはカナダ人と説明できる慣習、性質、観点を持っているか。もしそうならなぜか？どのような点で？
- ・クーブランドは彼とカーの空想の対話を作った。生徒には彼と一人、または二人の芸術家の対話を空想させる。
- ・対話の中でお互いにどんな質問をさせるのか？
- ・そしてどんな答えが期待されるか？

5. 研修活動

5-1 スケッチと彩色

目的：

生徒はカーの外で描いたスケッチを学び、クラスでスケッチをもとにした絵を描く。

話し合い：

カーはしばしば、木、葉、湖の色を調査し、彼女の作品に影響を与える天気、風、光の筋道を観察できる自然の中でスケッチをした。カーは木炭でスケッチを始めたが、後にガソリンを使って油絵を始めた。それは彼女の活動速度を速め、よりカラフルなスケッチを可能にさせた。彼女は今まで描きためたスケッチを使い、今までモノとは違う彼女のスケッチをもとにした油絵を描いた。

カーは次の文章を本の中に書いている。外での学びは、飲むことと食べるようになるように、スタジオでの学びとは異なっていた。部屋では作品を練る。指先で物を触り、物のくぼみや隆起を感じる。私たちは

構造を研究し、輪郭を観察する。外でスケッチすることはとても流動的で、見ること半分、想像半分、作業途中に出会う物に宿る精神に迫りくるものからの誘いを待つこと半分である。外でのスケッチは辛い労働のように長い。雰囲気や空間は生命ある野菜や、または石像を触るように触ることはできない。これらの空間的なものは指先で触って感じるものではなく、体全体で感じるものとされている。

材料：

その1

- ・クリップボードと紙
- ・鉛筆クレヨン、クレヨン、またはパステル

その2

- ・描くための厚手の紙
- ・絵の具（テンペラかアクリルが好ましい）
- ・筆と水入れ

工程：

その1

1. 二段階式のカーのスケッチ方法について話し合う。
2. 生徒を外へ行かせ、色つきのスケッチをさせる。自然の緑があるエリアをひとつ選ばせる。生徒に、初めの観点を決めさせる。

例えば

- ・接近して、木の幹や枝に注目する。
 - ・遠くから見て、木、芝、空を含めてみる。
 - ・見上げて、木の先端や、空の広がりを含めてみる。
 - ・一本の木に注目する。
3. 生徒に葉の緑や黄色、木の幹や枝の茶色や灰色、空の青さや灰色を近くで見ることを勧める。カーのような風景画の画家は使う色はひとつでなく、混ぜた色を使い、密集した表面を作り、豊かさを出すために影を作る。
 4. 生徒に2、3のスケッチをさせる。それは様々な観点やアングルで描かれたものや、接近したもの、または遠くから描かれたものなど様々が良い。彼らに細かく描くことを勧める。それは彼らの考えにある全ての要素を含んだ、色や形、線の筆の運びとなるだろう。

その2

1. スケッチをして一週間以内に、生徒に自身のスケッチの中から一番良いものを選びさせる。どの部分を残したいか、どの部分を変えたいか、構成はバランスが取れているか、または何か加えたい部分があるか、取り除きたい部分があるか。合成したい要素があるか。
2. 彼らが作業できる十分なスペースを準備する。
3. そして彼らに新しい絵を書かせる。紙全体に色を混ぜ、重ねることを勧める。

まとめ：

- ・彼らのスケッチの横に自身の絵画を展示させる。
- ・作品を観て、共通点、相違点（要素、場所、色、形、構成）について話し合う。
- ・スケッチで完成だとされるものがあるか生徒に尋ねる。色を塗ったあとより好ましいスケッチがあるか？それはどのような理由で？

5-2 キュレーターを選択

目的：

生徒は感銘を受けた作品と作った作品の中から一つずつ選ぶ。そして、それらから新しいものを発見するために繋がりを描く。

背景：

作品を選び、アレンジし、展示することがキュレーターの仕事である。この展覧会のキュレーターであるダイアナ (Daina) は、カーと現代の四人の選ばれた芸術家それぞれの間での対話ということで、この展覧会を準備することにした。芸術家との相談の結果、作品は生まれた質問や特別な問題の背景の範囲内で展示された。それぞれの作品は他の作品に影響を与え、カーの作品と他の芸術家の作品の新しい意味を作る。私たちはパートナーになった人から学ぶことについて示す必要がある。これらはキュレーターがこの方法で作品ひとつひとつを選ぶまでは必要なかった。

- ・対話は私たちの発想を活性化させる。
- ・生じた意味は本来作品に備わっているというより、むしろ新しい意味や解釈によって与えられたものである。
- ・教室内での活動は、生徒は意味を発想するという点で、キュレーターの役割を理解するようになることと、結果的に作られた繋がりを考えることである。

材料：

- ・本やインターネットから得た作品のイメージ図
- ・大きめの紙、マーカー

工程：

1. 生徒は本、インターネット、教室や家から気に入った作品を探し、そのコピーを授業時に持ってくること。
2. 過去に作った生徒自身の作品を一つ選ばせる。
3. 大きめの紙に二つの円を一部重ね合わせて描く。(参考：ベン図) 一つ目の円の真ん中に、1で選んだ作品の名前、二つ目の円に2で選んだ作品の名前を書く。
4. 生徒にそれらの絵の解釈や言葉や文を円の中に書かせる。
5. 選ばれた作品の表現に沿って繋がりや、比較したことで生まれた新しい意味に焦点を当て、図の説明をさせる。

まとめ：

議題：

- ・生徒はその作品だけでなく他と比較することで、作品について新しいことを学べたか？
- ・明らかになった予測できないつながりや新しいものはあったか？
- ・特別に驚いたことはあったか？
- ・仮に、生徒がこのような展覧会を開くとして、どのように作品を選ぶか？

5-3 箱の外で考える

目的：

生徒が入れ物を作り、そして今までに集めたもの、作った意味あるものをそれに保存する。

背景：

木箱は北西の海岸沿いの先住民たちによって作られた。スギの木片は彫られ、蒸され、箱の四面を作るために曲げられた。これらの側面は装飾されていないこともある。しかし、たいていの場合、曲げられ、伝統的な模様が描かれている。底面と天井は別のスギの木から作られ取り付けられている。伝統的な箱は価値あるものを納める入れ物として、儀礼的に、または家具として使われた。

ニコルソンはクワキウトルの背景を含めて活動した芸術家である。彼女は伝統的なアイデアを使うだけでなく、伝統的ではない方法でも、ものを変え、再解釈する。

彼女の作品である「Baxwana」は伝統的な箱のデザインが基になっているが、大きな違いがある。それは次のようなところである。

- ・木の代わりにガラス、写真、照明を使う。ガラスはFormline⁽⁶⁾のデザインでエッチングされていて、二

つの面には母と叔母の写真が載っている。

- ・儀礼的、または価値あるものを含める代わりに、箱には電球が使われている。箱は美術館の壁に、箱自体の影、訪問者の影を箱の中心から照明によって作り出す。
- ・伝統的な文化の歴史にとらわれないことによってニコルソンはより個性ある作品を作っている。

材料：

- ・何かの容器
- ・装飾用のクレヨン、マーカーなど
- ・紙、はさみ、のり、テープなど
- ・羽、ボタン、小石、ビーズなど表面に飾り付けるもの

工程：

1. 生徒に地元や地域の文化の中で、重要なものを収容できる箱のようなものを考えさせ説明させる。アイテムは以下のような事柄を含む。
 - ・テーブルクロスや毛布をしまう箱
 - ・おもちゃや衣類をしまう簡単な箱
 - ・宝石箱
 - ・家庭用の金庫
 - ・シナゴーク（ユダヤ教の礼拝堂）の箱
2. 箱の中のものについてなぜそれらは重要なのかを考えさせる。答えはきっと次のようになる。
 - ・家族、地域、文化、宗教の物語を語るから。
 - ・富裕層が持っているものだから。
 - ・箱の中の物は、財産的、感情的な価値を持っているから。
 - ・重要な書類だから。
3. コンテナを作ることを伝え、何を入れるか考えさせる。コンテナはどのようなものから作ってもよい。切って穴をあけ、内側が見えるようにしてよい。マーカーや絵の具で染色してもよい。表面に何か別の物をつけてもよい。生徒は、家族、文化や地域という観点から、どのような模様がそれらを表現するのに最もよいか考える必要がある。
4. コンテナを作らせる。
5. コンテナに重要なものを入れさせる。それは一つでもいくつかでも良いし、何か特別な意味がこもった紙きれでもよい。
6. コンテナについて発表させる。

まとめ：

- 彼らのコンテナやその解釈について議論させる。
 - ・共通している点や似ている点があったか？あったとしたらそれは何か？
 - ・似たような考えが違う方法で表現されていたか？あったとしたらそれはどのように？物はよく、ひとつの家族や地域と、部外者では違った解釈や理解がなされる。
 - ・生徒は発表者が作品について説明する前と、説明した後では違った理解を得たか？
 - ・それはどのように変わったか？

おわりに

美術館と学校教育の連携事業は、平成10年の学習指導要領の改訂以来、「地域の美術館、博物館の活用」ということで近年活発になってきた。本稿で紹介したバンクーバー美術館での教員研修プログラムのように、地域のあるいは国の代表的な美術家の展覧会を教材としている例も多く見られる。

本稿で紹介した展覧会はカナダで歴史的評価を得ているエミリー・カーに対して、現代の美術家が架空の対話をすることで、作品制作をしたものを展示している。その現代の美術家とカーの関係を研修内容に反映

させ、学校教育の教材を開発している。児童生徒がカーに対するイメージだけでなく、現代の美術家がどのようにカーに対してイメージを抱いて制作をしているかを理解しながら、自らがカーや現代の美術家と対話するような教材を開発している。こういった教材の開発のためには、美術館の学芸員と学校教員の連携が不可欠である。日常的な交流や連携によって開発された教材であるがゆえに、児童生徒にたいして効果的であるといえる。

注

(1) 本研究は文部科学省科学研究費補助金によるものである。基盤研究(C)、「地域活性化のための美術連携事業の調査研究」、課題番号：22520138、研究代表者：中野良寿、分担者：福田隆真ほか

また、本稿の主な資料は次である。Vancouver Artgallery, *In Dialog with Carr: Douglas Coupland, Evan Lee, Liz Magor & Marianne Nicolson, Teacher's Study Guide Fall 2010*

(2) 展覧会は2010年9月にバンクーバー美術館(アート・ギャラリー)で開催された。また、エミリー・カーと4人の芸術家は以下である。

- ・エミリー・カー (Emily Carr) : 1871年に生まれ1951年に亡くなった。ブリティッシュコロンビア (BC) 州のビクトリアに住んでいた。一人暮らしをしながらたくさんの動物を飼っていた。先住民の村、トーテムポール、森の景観図などを描いた。戸外で油性の塗料を使い、最終的に部屋に戻りそれを完成させた。年老いて著名な作家となり多くの本を著した。
- ・ダグラス・クープランド (Douglas Coupland) : 1961年ドイツで生まれ、現在住んでいるバンクーバーで育った。作家として有名で、彼の作品のなかで「Generation X」は最も有名である。カナディアン、特に先住民が一般的に持つ固定観念があしらわれたブランケットやキルトを作った。彼はCarrと空想の対話をした。
- ・リズ・メイガー (Liz Magor) : 1948年にカナダはウィニペグで生まれ、現在はバンクーバーに住んでいる。買ったもの、見つけたもの、作ったものなど様々なもので大きな彫刻を作る。「Beaver Man (たくさんの観点がある作品で、隠れ家、避難所、人間の行動が思い浮かべられるもの)」を作った。
- ・エヴァン・リー (Evan Lee) : 1975年バンクーバーで生まれ、現在に至る。彼はBC州の森のイメージをインターネットで手に入れると話す。森が焼けているところを描いた作品はインターネットで見つけたイメージを使った。イメージを印刷用の紙の裏側に印刷し、ブラシでインクを広げ、作品を写真というより絵画に近付ける。
- ・マリアン・ニコルソン (Marianne Nicolson) : 1969年にBC州のコモックスで、クワキウトルの母親とスコットランド人の父親のもとに生まれた。現在はビクトリアに住んでいる。博物館の展示用に、彼女の持つ文化を使った伝統的なものを作る。彼女の作品である「Baxwana」は伝統的な曲げ木製の箱であるが、多くの点で伝統的でない部分もある。それは、木の代わりに、ガラス、写真、照明が使われている点である

(3) Landscape : 世界の外面が表わされた芸術。伝統的に自然な場面を描いたもので、光、空間に関するもの。

(4) First Nation : カナダのアボリジニーカルチャー

(5) Site-specific : 特別な状況で作られるもの。たいてい、作品は分解の段階で破壊される。

(6) Form line : 初期のアボリジニーアートデザインの要素。基礎的なもので、英語を使う人がアルファベットを知っておく必要があるように、芸術家なら必ず知っておかなければならないもの。

付記

本稿の作成にあたり、資料の翻訳等において教育学部国際理解教室2学年の市川智己君の協力を得た。

参考文献

- ・Anne Newlands, *Emily Carr - an introduction to her life and art* -, Firefly Books, 1996.